

巻頭—ご案内

ニュースの発行方法を変更します！

向井 忍（地域と協同の研究センター専務理事・NEWS編集委員長）

地域と協同の研究センターの情報の共有化・発信のあり方を見直し、会員の皆様にお届けしている研究センターニュースの発行方法を今年秋より変更します。

研究センターでは、2011-13年の中期計画で、大きく四つの柱を掲げてきました。

(1) 「協同組合のあり方を探る」では、国際協同組合年の記念企画を開催し、毎年東海交流フォーラムで東海3県の実践交流を行ってきました。今秋には「生協の（未来の）あり方研究会」による書籍「生協運動の未来（仮称）」の刊行を予定しています。

(2) 「地域での協同を広げる」では「食と農」「環境」「地域福祉」「職員の仕事」の四つの分野で会員による自主研究と交流の場を継続しています。また三河、岐阜、三重の地域で会員の集いが定着し、生協と地域の関係団体等とのつながりが広がってきました。

(3) 「協同を担う人づくり」では、共同購入事業マイスターコース、組合員理事ゼミナールを開催し、加えて現在「協同の未来塾」の開講準備を進めています。会員への第三期研究助成も行っています。

(4) そして、四番目が、会員の拡大と情報発信の改善です。協同組合の組合員や職員をはじめとして、市民協同組織と協同組合に関わる一人ひとりに役立つ研究センターをめざし、ニュースや情報の改善を進めています。ホームページでの活動記事、Facebookによる行事紹介、総会記念シンポジウムの冊子発行など、会員がアクセスしやすい環境を整えてきました。

平行して、理事会のもとにあるニュース編集委員会で、会員に役立つ研究センターニュースの改善を検討してきました。このたび、以下の方向がまとまりましたので今秋より実施いたします。

①あらたに「研究センターニュース増刊号（（仮称）増刊・研究センター）」を発行し、2013年12月にお届けします。

②現在隔月発行している「研究センターニュース」は10月より「情報クリップ」と合体します。

- 具体的には
- 8月 研究センターニュース・情報クリップ
 - 9月 情報クリップ
 - 10月 研究センターニュースと情報クリップ合体
 - 12月 研究センターニュース増刊号

（（仮称）増刊・研究センター）

研究センターニュース増刊号は毎年2（～3）回の発行とし、特集テーマを設けて発行します。

12月発行の増刊号は、「これからのくらしと社会をめぐる状況と協同組合への期待」「協同組合としてそれにどう立ち向かうか（研究者と組合員／職員による座談会）」「すでに始まっている協同組合の実践」といった内容の構成で準備中です。さらに多くの方が、研究センターの会員となり、日常生活や仕事に研究センターを生かしていただけることを願っています。



写真を使った活動レポートを充実しました！
ホームページ



特定非営利活動法人
地域と協同の研究センター

第4回「原発事故と私の暮らし」連続学習交流会

文責／事務局

『改めて原発事故に学び

これからの暮らしを考える』

一ノ瀬正巳氏 講演 田邊準也氏 話題提供

くらしの見直し交流発表－「おしゃべり」 食と農、環境パネル

－改めて原発事故のこと、消費者としてくらしを見直すことの大切さを学びました！－

7月20日第4回「原発事故と私たちの暮らし」～改めて原発事故に学びこれからの暮らしを考える～学習交流会をワークライフプラザれあろにて、50名の参加で開催しました。まず、あいち年金者大学元代表・研究員の一ノ瀬正巳氏に基調講演を行っていただき、地域と協同の研究センター理事の田邊準也氏から話題提供を行っていただきました。

参加者からは、「活断層が多い日本に原発があること自体危険な事が分かりました」「消費者としてくらしを見直すことが大事との提起に共感しました」「みんながばらばらになるのではなく、もっと『つどい』ましよう」など感想が出されました。楽しく、無駄をなくす「くらしの工夫交流発表会」では6つのグループでおしゃべりをして、交流しました。（参照：5ページ）



《 一ノ瀬正巳氏 基調講演 概要 》



一ノ瀬正巳氏

福島原発事故で大変な目に遭いました。まだ、災害は終息していません。又福島以外にも多数の原発があり、予想される災害の恐れにも、私達はおの

いています。災害下で、災害の恐れの中で、私達はどうか生き残るのか、生きればよいのか・・・、これからの暮らしは、なお警戒心と、勉強と実践力が必要です。

活断層とは、日本はすべて変動帯

私が原発立地の問題に気づいたのは、大学が地質学科で、地質調査をすれば、たびたび断層を見ることがあり、断層の事や日本の地質を知っていたからです。阪神淡路大震災の野島断層も出来たてホヤホヤを見ました。あれは小さな断層でしたが、大きな災害を起こしました。地質学では新しい断層を活断層と言っていました。新しい断層は至る所にあります。原発を作るためには、そんなに断層があっては困りますから、電力会社はなるべく活断層を少なくしたいと考えました。地質学で活断層としていたのは第四紀の地層を切っている断層でした。年数で言えば250万年ほど前

から第四紀は始まります。活断層を少なくするために電力会社は何をしたかといえば、何と12～13万年前からということに変更しました。これで「活断層」はうんと少なくなります。活断層という時、それは「新しい」ということを示すだけです。古い断層だからといって、もう動かないという保証は何もありません。似たようなことで、活火山というのは、現に噴火している火山ですが、死火山という用語は今ありません。死火山と言っていたのに噴火したことがあるからです。だから、活断層というのは「活着している」断層、普通の断層は「死んでいる断層」と考えるのは間違いです。およそ、活断層でなくても、断層があること自体が、安定した場所ではなかった事を示しています。再びストレスを蓄積しつつあると警戒すべきです。日本には至る所に断層があります。それくらい日本はすべて変動帯なのです。新しく断層ができることもあります。12～13万年以前か後かだけを議論しても、あまり意味がありません。

伊勢湾から若狭湾にかけて断層が密集しています。養老断層(養老山脈)もその一つです。地形的に見ても本州で一番細い地峡で、言わば「千切れかけている」ところです。断層ができて当然です。原発のその場所だけでなく、広く地域全体を総合的に見なければ立地の適否の判断はできません。

日本には四つのプレートが集まっています。世界でも珍しい所です。プレートどうしは力を及ぼしあっていますから、日本列島には地震が多く、



火山も噴火するし、地殻変動があります。そんな日本列島が安定して静かであるはずがありません。原発を作るには、全く不適当な所で

す。外国では殆ど例がありません。

過酷事故への準備

大勢の人にお勧めするわけではありませんが、時に、全く電気のない生活を経験する事もあってよいと思います。名古屋に住む私は、遠くない時期に、浜岡か若狭湾沿岸の原発の過酷事故に遭う確率は高いと思うので、その時どんな所で避難生活をすればよいのだろうかと考えています。名古屋は、浜岡から130km、若狭湾からは80kmです。なかでも震源域のど真ん中にある浜岡は直下型地震となり、福島どころではない大事故が予想されます。名古屋は全市避難となるでしょう。市には、その計画はありません。過酷事故となれば、おそらく行政の対策も、外からの救援も届かないであろう事態が想定されます。電気のない生活、山菜やココロギや木の実を採って食べる生活、天幕小屋の生活が現実のものとなりそうな予感がします。無人島で生活できる能力を持ちたいと願っています。

原子力の平和利用について

原子力の平和利用については、1953年にアイゼンハワーが国連で演説をしました。平和利用なので結構ではないかと思いましたが、実はこれはマヤカシでした。核による世界支配のために発電用原子炉を普及し、その技術と一緒に核燃料も供給する体制を作って、国内の核産業を守るという考えが隠されていました。ウラン原子炉には、プルトニウムが出来ますから、原子爆弾の材料が「平和産業」の中で生産され続けます。平時の利用が原発なら、その戦時利用が原爆だと言えます。

一方で、原子力発電所が平和な安全な発電装置かといえばそうではありませんでした。原子炉は非常に巧緻にできておりますが、大エネルギーを発生するので、その機構に不安があります。リスクに際して、核分裂反応を停止する装置は二段しかありません。また複雑なパイプ類が、地震動にたえられるかどうか、冷却用海水の取水口は津波の引き波、寄せ波に耐えられるかどうか。特に、原子炉や発電装置のちょうどその場所に断層が出来るならもう全く処置なしになります。もし万が一爆発すれば、原発の放射線の害はトータルでは原子爆弾以上になります。原子炉は、24時間365日運転を続けているので、原子炉の中にど

んどん放射性物質が蓄積され続けているからです。

電気を使う生活

今や電気のない生活は考えられません。しかし、さしあたりの心配はいりません。今年の夏は、原発はみな止まっています。それでも何とか耐えました。もちろん余分な電気は使ってはなりません。しかし、家庭の夏のクーラーを止めたり、冬の電気炬燵を節約したりする必要はありません。一方で、部屋の蛍光灯が五本あれば一本はずせば2割の節約になります。トイレの電灯は使わないときは消すというようなことは当然です。可能なことは大いにやり、将来の自然エネルギーだけの生活の準備をしましょう。

石油にしろ、天然ガスにしろ、そしてウランも無限に資源があるわけではありません。これからの私たちの暮らしは、基本的には電力の使用を限りなく増大するような事は止めて、相当に「慎み深く」ならねばなりません。人類の活動は、既に地球の自然に影響を与えています。太平洋の真ん中のハワイで観測される大気中の二酸化炭素は、記録紙上に綺麗な季節変化と年次的な直線の上昇を示しています。世界各地の氷河は、その末端が明らかに後退しています。温暖化は明らかです。地球のリズムからすると現在は氷河期に向かっている筈で、今の温暖化は一時的な波に過ぎないとも言えますが、それは地質学的な年数の話で、今は産業革命以来の人類の活動の影響があることは否定できません。

「くらしの見直し」とは

生活の見直しが必要なら、根本はこのエネルギーを、ふんだんに使う「経済成長政策」を正すことに尽きます。「再生可能と持続」の域を超えて地球の財産を食いつぶし、やたらと熱を発散し、調和している環境を乱し、汚染します。大地に還元しない大量のゴミを出します。そして人を過重労働に追い込み、貧富の差を導きます。人の浪費、人の使い捨てです。現状は将来の事を見ない「刹那主義」になっています。

経済活動は地球の許容範囲で行うべきもの、そして人間のためであるべきものです。豊かな自然の中で、夜は早く寝て朝は早く起きる、家族団らんも出来るゆとりがなければなりません。それを可能にする改革の運動が必要です。「くらしの見直し」とはこういうことでしょう。



消費者、命の再生産者の立場で考える

一ノ瀬さんが言われる、今、私たちのくらしの見直しが必要じゃないかという提言に強く共感いたします。原発問題は非常に高度に専門的で、とても素人には関知できないテーマですから、専門的に、安全か安全でないかという議論をしても、どうしても負けてしまうところがあります。しかしこれは基本の命にかかわる、自分自身の問題ですから、決して専門家の皆さんに任せていい課題ではありません。



田邊準也氏

安全か安全でないかという議論をしても、どうしても負けてしまうところがあります。しかしこれは基本の命にかかわる、自分自身の問題ですから、決して専門家の皆さんに任せていい課題ではありません。

解決するのは消費者

このテーマは、素人であるこの消費者の役割が大きいと思います。消費者が、食の問題に関心を持つのはごく当然で、命の問題を考えた時に、それは食の問題になります。消費者は命の問題に関して必死で、あいまいではなく、必ず主義主張を貫きます。やはり命のことになれば他人のことも考え、とりわけ子供のことを、自分の命以上に真剣に考えます。問題は、原発を推進している皆さんも消費者だということです。この皆さんが、自らが消費者であると理解をすれば、そう簡単に推進なんかできるとは思えません。そうでないのは本来の消費者の生活の価値観と、また別世界の価値観を持っているからだろうと思います。生産者は消費者の要求を積極的に受け止め、必死になって生産し、サービスを提供します。その結果、ある意味で豊かな生活が実現できています。ここで生産者同士の競争があることが問題になります。とどまることを知らず、利潤を求めて競争はさらに激化します。生産者の立場からすると、企業として命がけでがんばります。ここで価値観の転換が起こります。このことから、この問題は消費者の問題になり、解決するのは消費者なのだという考えになるのではないかと思います。

私はいわゆる高度経済成長期より、一貫して生協活動、消費者運動に関わってきて、消費者としてはどうあったらいいのかということを考えてきました。生産と消費のアンバランス、あるいは乖離はダメで、生産と消費をいかに結びつけるか、

直結するかが大事でした。農産物なんかに関しては産直、産消提携という活動で、それを追及しました。一般食品については、コープという名前で、生産者・メーカーと力を合わせて、共通した商品を作ることをやってまいりました。そんなことを思い出しながら原発事故を目の当たりにして考えると、私はこの種の問題が全く新しい時代に入ったのではないかと考えます。

くらしのあり方、価値観を変える

電気のないくらしを創造することは、くらしの価値観というものを転換するという意味合いで、非常にはっきりと問題を突きつけます。こういう自然エネルギーを大事にしよう、エネルギーを節約しようというのは、すでに1973年の石油危機のときやっています。石油がなくなると、従来のような生活はもう続けられません。生協でも節電はもちろんですが、店舗でノーサッカー、ノートレイ、その延長線上に環境にやさしい商品づくりだとか、農業をもっと見直そうなどの活動がどんどん広がりました。ただ、私が振り返って思うことですが、この運動、石油危機に伴う運動にはどこかに大きな落とし穴、弱点があったのではないかと思います。今までのくらしはそのまま維持したい、でも石油はなくなる、だから節約する、そういう論理だったと思います。今私たちがどうしても考えなきゃいけないのは、高度経済成長政策のもとで培われた、くらしのあり方、価値観をどこかで根本的に変えなきゃいけないというテーマじゃないかと思うのです。

3・11東日本大震災・福島原発事故により、大きく私たちにインパクトを与えたことは、当たり前前のくらしがしたいということでした。そして、それがどんなに豊かなくらし便利なくらしといっても、それよりも価値はあるとお互い理解しあったということです。「くらしの見直し」が、根本的に求められている時代に入り、高度経済成長のいわば終焉と、新しい社会の経済の始まりに入ったと思います。

原発はやめられる

一般論で申し訳ありませんが、日本には憲法があり、国民が主権者だという考え方で貫かれています。その憲法を変えようという動きがあります。変えるという人たちは、何を考えているのか、私は今、日本の経済をリードしている人たち、中でも原発を推進している人たちが、国民多数は自分達と違うようになってきて自分達の意見が通らなくなるという危機感から、憲法を変えようとしているのではないかと理解をしています。憲法がある限り、原発はやめられると考えます。

第4回「原発事故と私たちの暮らし」～改めて原発事故に学び、これからの暮らしを考える」

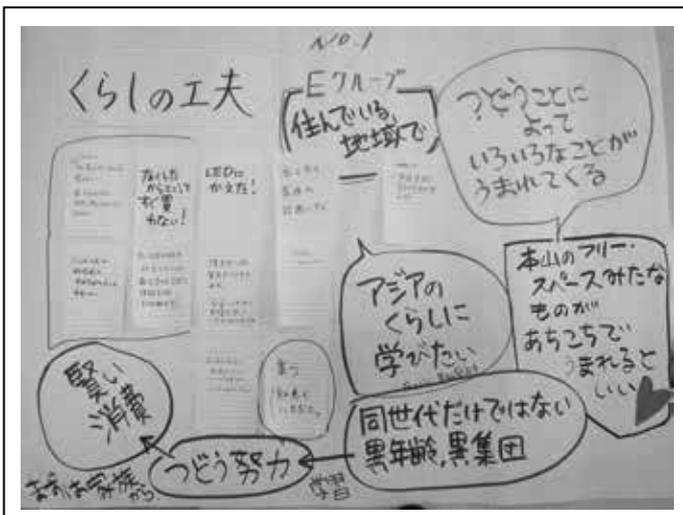
「暮らしの見直し交流・発表会」

グループで、おしゃべり!!「暮らしの工夫」「暮らしの見直しへの思い」を出し合いました!!

7月20日「原発事故と私たちの暮らし」での「暮らしの見直し交流・発表会」では、おしゃべりをしながら、自分が実践している暮らしの工夫、暮らしの見直しへの思いを出し合い、私たちの「より良い暮らし」に向けて、多くの方々へ発信したい、または、発信してはと思う、「**家庭で実践できる暮らしの工夫**」「**暮らしの見直し—10年後に向けて**」を模造紙に表現して、発表しあいました。その一部をご紹介します。



《「家庭で実践できる暮らしの工夫」》・・・カードに記入されたこと



「暮らしの工夫」—Eグループ

- ・今必要のないものは買わない。買いだめしない。結局使わなかったりするの。
- ・無くなったからといってすぐには買わない。
- ・LEDに変えた。
- ・省エネを家族の話題にする。
- ・暮らしの工夫は科学的に、非科学的な考えは実現しない。
- ・私は本が好き。新品でなくても良い。最近ブックオフを積極利用。(生活も助かる)
- ・湯沸かし器、電気ポットをやめた。食堂などいつも多く電灯を使うところの電球を、LEDに変えた。
- ・ありふれたことですが、消費電力を少なくすることしか出来ません。アジアの人の生活に学ぶ。
- ・集う、知恵をいただく。
- ・早寝、早起き。余分な電気を使わない。

「暮らしの見直し—10年後に向けて」Eグループ

- ・不自由を楽しめる生活環境に挑戦
- ・自分の家で使うエネルギーを自分で生産できたら。
- ・我が家の電気を我が家で作る
- ・今より、物ではない豊かな暮らし
- ・ある面を良くしても、新たに悪い面が発生しないように慎重に検討すること、それには多くのグループによるべきだろう。
- ・暮らしに必要な物だけを残し、シンプルな暮らしをする。物がある事が豊かさだと思わないように考えを変えていく。(発想を変える)
- ・昼間活動、夜は家で休む。街(世の中)全体で取り組む。コンビニ、商店街も24時間ではなくする。夜は家に帰ろう。
- ・器用になる
- ・なるべく電気を使わない。小型の太陽光発電の活用。
- ・コミュニテイ施設の充実。



カードに記入されたこと・・・《暮らしの見直し—10年後に向けて》

交流会で発表したものの全部は、研究センターホームページ FACEBOOK で紹介しています。また、7月20日の学習会までに寄せられた、工夫や思いは、別紙で発表します。

「その他の意見」—Eグループ

- ・やはり原発には断固反対しよう!
- ・原発再稼働は絶対反対!・原発反対広める
- ・小さな集まりで原発の事を語りあう。
「3人寄ればもんじゅの知恵」
←この運動のためにもつどう場所、つどう時間..... いろんなものが必要

ご覧下さい!

「環境パネル 3生協合同 夏の環境フィールドワーク」企画 報告（文責：事務局）

「アライダシ原生林エコトレッキング」

貴重な自然を次々に体感！！ 守ることの大切さを学ぶ

7月28日（日）に夏の環境フィールドワーク「アライダシ原生林エコトレッキング」を、コープぎふ主催、研究センター環境パネル共催で開催しました。当日は愛知・岐阜・三重から参加した研究センター会員やコープぎふの組合員など、全体で38名が参加し、恵那市上矢作町の「アライダシ自然観察教育林」を散策しました。ガイドをいただいたNPO法人福寿の里自然クラブの方からは、原生林と人工林の違い、アライダシの地域は矢作川の源流域であり、その湧水は三河湾に流れ込んでいること、針葉樹と広葉樹が混在していること、サワラ、ミズナラの共生木、根上がりの木の様子など貴重な植生について案内いただきながら散策しました。



自然観察林の入り口で、周囲5m樹齢350年ほどのミズナラの大木に迎えられました

◆行程表◆

- 9:20 道の駅「上矢作ラ・フォーレ福寿の里」集合
住所：恵那市上矢作町3566-1
- 9:30 道の駅からマクロバス等でアライダシに移動
- 10:30 アライダシ自然観察教育林到着
オリエンテーションと散策
(14:00 昼食)
- 14:30 車両で帰路に
途中、風力発電所、大舟神社・弁慶杉見学
- 16:00 道の駅「上矢作ラ・フォーレ福寿の里」着、
解散。～金山駅着（18:00頃）

次から次へと普段見る事がない貴重な自然を目の当たりにして、感動の連続でした。何より、地域の要望で手付かずの自然として残されたとのこと、貴重な自然を守っていく事の大切さを学びました。

参加者からは、「原生林と人工林の違いを目の当たりに出来た」「森がどのようにできるのかを考えるのは非常に楽しかった」「腐葉土は柔らかくて、原生林でストックが1m近く突き刺さったのは驚きだった」「ここから生まれる水が三河湾にも流れていくと聞き、山を守る事が海を守ることだと実感」「この様に生まれる水が農業や産業、私たちの使う水、河川の氾濫などなど、つながっていることを実感できると林業にもっと関心や敬意が払われる」などの声が出されました。



根上がりの木ーキリン
(倒木や切り株の上に
実生し成長、倒木や
切り株が朽ちてなくなる)



倒木からカエデなどの実生
(自然のままの森で、植林は無い。
倒木の上は日当たり、水はけなどよい、
コケはスポンジのようだった)



共生林
(異なる樹木が根元や途中で
一体になったもの
これは、ミズナラとサワラ)

食と農パネル 「日本農業の現状に学ぶ」学習会 報告

— 水田農業と集落営農 — 荒井聡先生の講演より

7月13日、22名の参加で、「日本農業の現状に学ぶ」学習会を開催しました。講師は研究センター理事で岐阜大学教授の荒井聡先生です。ニュースでは、その荒井先生の講演の概要をご報告します。詳しい報告の必要な方は事務局までご一報ください。(文責：事務局)

□ 食料自給率 □

日本の食料自給率供給熱量ベースの数值は、1965年が自給率73%、1985年には53%、現在はそれが40%に転落しています。その40%は、ほとんど米で支えています。TPPが実施されると、大きな打撃を受け、全体が下がり、27%に低下すると予測されています。農家の減少もこの間続いています。ほとんど輸入に頼っているのは油脂類、小麦です。

□ 農業所得 □

生産者の所得はどれくらいでしょうか。営農累計別農業所得・1時間当たりの数值を見ると、たとえば北海道の畑作は、1時間あたり2000円で、サラリーマン並の所得です。しかし、それ以外では、1時間あたり600円から800円と低迷しているのが特徴です。実際は、時給1000円以下の所得で、仕事として従事することを選択する年齢層の人が中心になって、農業を支えています。

□ 集落営農とは □

これからの集落の農業づくりについて、みんなで話し合い、共通の目的を持って、取り組んでいくのが集落営農です。小さなままで協同してことにあたるのが特徴です。農業における協同で、協同組的な動きということになります。

定義としては、集落など地縁的にまとまりのある一定の地域内の農家が農業生産工程の全部または一部を共同して行う営農活動、又はそのような営農活動の総称です。農業に加えて、集落農業の維持管理、地域文化の継承なども含めて「集落営農」と言っています。共同で機械を所有するレベルにとどまるものから、1集落1農場という完全な農場まで色々な形態があります。

愛知県では7.7%とあまり進んでいませんが、三重県では18.6%、岐阜県では26.6%で集落単位の取り組みがあります。

第一の目的としては、「地域の農地の維持管理」です。みんなを取り組まないと農地が荒れてしまうので、集落営農に取り組んでいます。機械の共同所有・共同利用が8割ほどでされています。従来は、集落営農一括の運営は少なかったのですが、最近では3割くらいが、ひとつの集落でひとつの農場になっています。組織が強固になり、米、麦、大豆と土地利用率は高く、二年三作です。



荒井聡先生

□ 集落営農の多角化・6次産業化 □

菓子店から製粉技術を活用した農業参入で、米粉でパンや麺を作っているところがあります。耕作放棄地を活用しています。今年から白川村で、村の若い3家族が、米粉用の米を栽培しています。世界遺産になったけれども、この村で作る商品がない、ぜひこれを売り出したいという形で展開し、遊休地を解消しています。

集落営農の多角化は、加工(味噌、菓子、漬物、豆腐、パン)、レストラン、直売、観光にまで広がりを見せてきています。

□ 今後に向けて □

集落でのつながりをどう組織化するか、それに消費者がどう関わるかが重要になります。顔とくらしが見える関係、これが産直の原点ですが、あらためてこの原点を確認する必要があります。環境配慮、食の安定供給と地域の持続的発展の点から、消費者と生産者が共に支えることが大切です。TPPという大きな問題、これは学習が大事です。適切な国境調整と、標準的経営を基準とした所得補償を車の両輪としてすすめることで、農業の持続的な発展が可能となります。



「私たちにとって

「協同」とは」

青木文子

（ぎふ「協同労働の
協同組合」勉強会）

「地域での連携で実現しました」

前澤このみ（コープあいち）

今、3枚の名刺を持ち歩いている。1枚は生業の司法書士。「あ～、司法書士されてるんですね～」。もう1枚は「ワールドカフェぎふ事務局長」の名刺。最後の1枚は「ぎふ「協同労働の協同組合」勉強会」。多くの人はそこでしげしげと名刺を眺めてこう口にする。「協同労働の協同組合ってなんですか?」。ついでに「で、本業はどれですか?」という言葉もくっついてくることも多い。

2011年夏過ぎに「協同労働の協同組合」という概念を知ってからちょうど2年。今、一緒に勉強会をしている森さんから「協同労働って知ってる?」と投げてもらったことから知った「協同労働」。2011年11月から「協同労働」について知っていきたくて、ぎふ「協同労働の協同組合」勉強会を始めた。

今、手元に池上淳先生の『協同と福祉の思想』がある。この本を読むと、民間学童の立ちあげや任意団体でのフリースクール運営に関わっていた自分の経験を思い出す。そして照らし合わせて思う。『あそこで私が仲間とやっていたことは「協同労働」だったんだ。』

「協同労働」において欠かせないことはいくつかあるが、その中で一番不可欠なことは「対話」ではないだろうか。異なる価値観同士の間でお互いの物語を語り合うこと。その中から一緒に着地できる場所を探していくこと。ワールドカフェという対話の手法を通して、多くの人に対話の場を作りたいと続けてきた活動とも「協同労働」は繋がっている。

今、あちこちで、「協同労働」について人に話す。「協同労働ってね」と話をしたときに、数少ないけれどもこう反応してくれる人達がいる。

「それがやりたかったんですよ!」。人と人が集って一緒に何かをなしていこうとするときに、私たちの中にもともと内在させている振る舞いや立ち方が「協同労働」ではないだろうか。「協同労働」に向かい合うことは、新しい概念を学ぶというよりも、どこかに置き忘れてきた「協同労働」という人と人の関わり方を思い出し、取り戻すことなのではないかと思っている。

「コープカレッジあいち」は生協が主催する誰もが気楽に参加でき、教えあい学びあえる場です。とはいうもののコープあいち新城センターエリアは長野静岡県境の山あいであり、地元の会場開催でなければなかなか参加は難しいところです。

そんな地域で設楽町、愛知県新城設楽農林水産事務所、新城市、東栄町、豊根村、愛知県食育推進ボランティア、コープあいちが連携してひとつの行事を行いました。7月7日(日)北設楽郡設楽町津具のつくグリーンプラザで開催した「山里美味博」です。ホールでは小川雄二先生を講師に食育講演会(コープカレッジ)「食育で育つ体と心と生きる力」を、隣接する調理室では愛知県食育推進ボランティアが地元の野菜をトッピングした山里ピザづくりを小中学生といっしょに行い、プラザ玄関前では新城市、設楽町、東栄町、豊根村から奥三河の自慢の産直品が即売されました。

この日は七夕だったので、ロビーには笹竹が二本立てられ、来場者に短冊を書いてつるしてもらいました。七夕飾りは前日までコープあいち福祉サービス新城のディスプレイに飾ってあったものをいただきました。

たいていはコープあいち単独で開催するコープカレッジですが、昨年12月の「新城設楽食育推進ボランティア連携会議」で私



から「平成25年度にコープあいちといっしょに食育講演会を開催されませんか?」と提案し、設楽町からOKをいただきました。特に愛知県食育推進ボランティアのみなさんからは「楽しい企画をしよう!」と力強い励ましと協力をいただいて、地域の野菜をおいしく活かす取り組みが実現しました。

「山里ピザづくり」は、11月2日に新城市で開催されるJA愛知東とコープあいちとの協同組合まつりでも、JA女性部と生協組合員との共同企画として秋の食材を使って手作りする予定です。

それぞれに出来ることは小さくても、地域の中で連携しあうことで楽しく実のある取り組みが出来る!と感じた夏でした。

INDEX

| | |
|---------------------------|-----|
| 巻頭 ニュースの発行方法を変更します!! 向井 忍 | 1 |
| 第4回「原発事故と私たちの暮らし」連続学習交流会 | 2-5 |
| 環境パネル アライダシ原生林エコトレッキング | 6 |
| 食と農パネル 日本農業の現状に学ぶ学習会 | 7 |
| 会員交流の広場 5 | 8 |

2013年8月25日(偶数月25日発行)

定価200円

(税・送料込み。年会費には購読料が含まれています)

発行 特定非営利活動法人地域と協同の研究センター

代表理事 川崎 直 巳

〒464-0824 名古屋市千種区稲舟通1-39

TEL 052-781-8280 FAX 052-781-8315

E-mail AEL03416@nifty.com

HP <http://www.tiiki-kyodo.net/>